

2017年度
国際キャリア教育プログラム
「合宿セミナー」

国際キャリア教育
事前学習資料集

主
協
後
協

催：大学コンソーシアムとちぎ 宇都宮大学
力：白鷗大学
援：（公社）栃木県経済同友会 （公財）栃木県国際交流協会、
NPO 法人宇都宮市国際交流協会 いっくら国際文化交流会 JICA 筑波
賛：（一財）栃木県青年会館 （公財）あしぎん国際交流財団
キリンビール（株）栃木支社

国際キャリア教育運営委員会 委員長
国際学部国際社会学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、過去 13 年間における参加者数は約 1460 名に及び、多くの学生（宇都宮大学生、他大学等含）が参加しております。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア教育」、英語で全て授業を行う「International Career Seminar」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化 (Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、白鷗大学からご協力をいただいたほか、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団、そして、キンビール(株)栃木支社からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要綱

- 1) 科 目 名 : 国際キャリア教育～2017年合宿セミナー～
- 2) テ ー マ : グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日 程 : 2017年8月26日(土)～28日(月)＜2泊3日＞
- 4) 会場・宿泊 : コンセーレ(栃木県青年会館)
 ＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
 ＜問合先＞TEL: 028-624-1417
 ＜URL＞ <http://www.concere.jp/>
 ＜地図＞



- 5) プログラム : 2頁を参照
- 6) 参加定員 : 70名
- 7) 参加費 : 12,000円(食費・宿泊費を含む)
- 8) 問 合 せ : 宇都宮大学国際学部 事務室(5号館A棟1階)
 担当 : 山口 陽子
 ＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町 350
 ＜問合先＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
 E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（8月26日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1 分科会「国際ビジネス A」 講師：生方 玉也 分科会「国際協力・国際貢献 B」 講師：後藤 章 分科会「国際協力・国際貢献 C」 講師：下田 寛典 分科会「国際協力・国際貢献 D」 講師：鈴木 真里 分科会「多文化共生と日本 E」 講師：田巻 松雄 分科会「異文化理解・コミュニケーション F」 講師：芳村 佳子
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（8月27日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（8月28日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	ふりかえり／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

1. 国際キャリア教育プログラム倫理綱領

本プログラムの関係者は、以下の原則に従って行動します。

- ① その活動において、常に基本的人権と個人の尊厳を尊重します。
- ② 国際学部並びに本プログラムの教育目標の実現に資する教育を行うために、改善と向上に努め、学生の自発的な学習を支援します。
- ③ 学修目標を明確に示し、学生への対応や成績評価などの学生指導全般において、公正を確保します。
- ④ 個人情報の保護に最大限の注意を払います。

2. 倫理綱領に基づく個別ガイドライン

以上の倫理綱領に基づき、特に以下の点について配慮をお願いいたします。

- ① 人種やジェンダー、言語、宗教、国籍、社会的背景、年齢等が異なる多様な参加者で構成されているプログラムであることに留意しつつ行動します。
- ② 食事や信仰生活を含む生活様式を尊重し、可能な限り対応します。
- ③ ハラスメントに該当する行為は決して行いません。
- ④ ハラスメントに関する情報を得たり相談を受けた場合には、放置せずに対応します。
- ⑤ 参加者による主体的な学びを尊重し、その提案や意見を積極的に取り入れます。

3. 具体的な過去の問題事例

(事例にある「参加者」とは、講師、スタッフ、学生等の参加者全員を意味します。)

事例 1) 国籍による差別発言

ある参加者から「A 国人は物を盗む」といった国籍による差別的な発言があり、その国籍を有する他の参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 2) ジェンダーや多様性への配慮を欠いた発言

ある参加者が、男性的な服装をしている女性の参加者に対して、「いい歳なのだから、もう少し女性らしくしないと」とジェンダーに関する配慮に欠ける発言があった。その結果、トランスジェンダー¹であるその女性参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 3) ハラスメントに該当する行為や発言

ある男性参加者が懇親会で他の参加者に酒を飲むようにしつこく勧め、男女問わず「付き合っている人はいるのか」等と質問をして無理に答えを聞こうとしたり、女性の参加者に対して酔っ払いながら「肩をもんでくれ」と頼んだりした。

事例 4) 主体性や協働を認めない教育

分科会において講師が一方的に講義を続けたり、一部の参加者のみが発言を独占する事態が発生した。その結果、学生たちが主体的に協力しながら行う議論や全体発表準備のための作業時間を、十分確保することができなかった。

事例 5) 許可を得ないで行う個人情報や写真の使用

ある参加者が、他の参加者の連絡先などの個人情報や撮影した写真を、相手の許可なく SNS などを使って公開し、別の目的で利用した。

¹ トランスジェンダーとは、出生時に決定された性別に性的違和（性同一性障害）があり、性別を変えて生活していたり、性別を変えたいと思っている人（性と人権ネットワーク作成パネル、2014 年より）。

混迷の時代の国際キャリアを考える ー真のグローバル人材に必要な条件ー

☆講師プロフィール

氏 名：重田 康博（しげた やすひろ）

所 属：宇都宮大学 国際学部 教授
国際キャリア教育運営委員会委員長



略 歴：

北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了（博士・学術）
国際協力推進協会（APIC）主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員（イギリス・ロンドン）、現、国際協力 NGO センター（JANIC）主幹を経て現職。専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。オックスファム・ジャパン監事。開発教育協会評議員、JVC とちぎネットワーク代表。CMPS 福島乳幼児妊産婦プロジェクト・アドバイザー、JANIC 政策提言アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』（明石書店 2005）、『国際 NGO が世界を変える』（共著、東信堂 2006）、「第 4 章ミレニアム開発目標」田中治彦編著『開発教育ー持続可能な世界のために』（学文社 2008）、重田康博『激動するグローバル市民社会ー慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017 年

全体講義の内容

全体講義の内容

今世界は混迷の時代と言われています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。

★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。

21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曾有の危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバリゼーションの進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO（市民社会組織）も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。

この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。

では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011年6月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめ」では、そのポイントとして、「語学力向上（英語）」と「内向き志向」の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？

★第3に、宇都宮大学や国際学部のグローバル人材の育成の事例を紹介します。

☆宇都宮大学グローバル構想―「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献

☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い2017年4月から実施）

⇒21世紀型グローバル人材（グローバル人材）の育成

☆国際学部の卒業生は、その多くがグローバル企業、マスコミ、NGOなどで働き、国内外で活躍しています。

★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。

「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思います。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals）」は、2015年9月の国連総会で採択され、17の目標と169のターゲットからなり、2016年から2030年までの15年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが問題の解決に向けて取り組むことが求められています。

☆「地球公益（地球市民のための公益、Global Public Interests）」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思います。

参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』明石書店、2015年
- 加藤／九木元『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』青弓社、2016年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会―慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育―グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 2012年

海外で働く、起業すること

☆講師プロフィール

氏 名：生方 玉也（うぶかた たまや）

所 属：株式会社光洋 代表取締役社長



略 歴：

群馬県出身 1952 年生まれ。家電メーカーに勤務し、T P M 世界大会へ日本代表として参加。その後数社の中小企業経営に携わると共に栃木県経済同友会にて社会貢献活動推進委員会委員長、国際化推進委員会副委員長等を歴任。現在は株式会社光洋の代表取締役社長を務める。海外経験も長く、シンガポール駐在、ベトナムにて会社を設立し社長。その間に訪問した国約 40 ヶ国。

1. 仕事の内容・研究テーマ

私は 36 才（1989 年 1 月）から東南アジアを中心に海外駐在、海外担当として 15 年間海外生活を送ってきた。その間、ベトナムにて会社設立も経験した。その後、国内数社の中小企業経営を引き受け大企業と中小企業の違い、国内と海外の違いを体験してきた。現在は情報通信端末等のキーユニットを主製品に開発・製造を行っている株式会社光洋の代表取締役社長。2020 年東京オリンピックに向けキャッシュレス環境の構築が進んでいて、当社の主製品である CAT 端末（Credit Authorization Terminal）も新製品の開発、導入計画が進んでいる。

2. キャリアパス

大学卒業後、大手家電メーカー関連会社に勤務。改善手法 IE、ZD、QC、TQC 等を学ぶ。

36 才の時（1989 年 1 月 7 日）シンガポール赴任。赴任時英語が全く解らず一念発起し現地の英会話学校夜間に通い勉強をした。1994 年にはベトナムホーチミンに会社を設立。投資申請、土地取得、工場建設、幹部社員採用を経験。その間、現地の社員、現地の方々との付き合いの中で沢山のことを経験し 1996 年夏に帰国。その後、国内数社の中小企業経営を行った。その間訪問した国約三十数か国。

海外経験・国内中小企業経営の中で日本は如何に良い国、生活しやすい国であるかを感じている。但し、もしかしたら幸せに浸りすぎて世界を視る視線が不足していないか？と感じる時がある。

3. 分科会の内容

- 海外で学ぶ・働く・起業するためのアクションプランを企画立案する。
- 海外（主に東南アジア）で働くこと、起業することについて 自身の経験を含めた議論により理解を深める。又、海外で学ぶ・働くことの意義を学ぶ。

- グローバル社会と言われて久しい（1989年11月9日；ベルリンの壁崩壊）が日本の若者は内向きといわれる事が多い。
 - 何故内向きが多いといわれるのだろうか？
 - グローバル人材とは・・・？
 - 外向き、内向きってどういうこと？
 - 海外で学ぶ・働く・起業するとは・・・??
 - 今なぜ海外なのか

4. キーワードリスト

- グローバル化
- グローバル人材
- ダイバーシティ

5. 参考資料等

- サイゴンのいちばん長い日 文春文庫 近藤絃一
- ドラッガー関連本（ドラッガーが語るリーダーの心得 青春出版社 小林薫）
- チーズはどこに消えた 扶養社 スペンサー・ジョンソン

6. 事前予習用リーディング課題

＝自分の興味のある国を前提に＝

- A) その国に興味を持った理由。
- B) その国に留学する、その国で働く為にはどんな準備が必要か。
- C) その国へ留学、働くことで何を行い、何を得たいか。

海外で学ぶ、海外で研究する

☆講師プロフィール

氏 名：後藤 章（ごとう あきら）

所 属：宇都宮大学 名誉教授、特命教授（国際交流担当）

略 歴：

1951 年札幌生まれ。専門は農業水利学、水文環境学。東京大学助手を経て、1992 年 1 月に宇都宮大学農学部（農業環境工学科）に赴任。以来 25 年間、2017 年 3 月に定年退職するまで宇都宮大学で教員生活を過ごした。この間、2004 年から 4 年間、留学生センター長を務めるかたわら、この国際キャリア合宿セミナー第 1～4 回の実行委員長として企画・運営にあたった。

1. 仕事の内容・研究テーマ

<大学における学問と教員の仕事>

高校までの勉強はすでに答の用意されている問題を解くものであったのに対し、大学での学問は未解明の問題やそもそも 100 点満点の答が期待できない問題を対象にしている。つまり、未解明の領域、未知の領域を開拓していくという学問の最前線を担うのが「研究」であり、これが大学の主要な役割となっている。研究は大学教員の仕事である一方、学生もまた研究の重要な担い手である。とくに大学院生の研究が大学全体における研究活動を支えていると言っても過言ではなく、いわば教員と学生の共同作業として大学の研究が進められている。卒業論文の研究においても、教員の指導を仰ぎつつ、未知の領域へのアプローチの仕方、つまり課題設定、分析手法、成果のまとめ方などの一連の作法を学ぶ。こうした作法の習得は、一般社会での複雑な問題への解決策を探る際にも有用である。このような研究活動において求められるのは、単に教わるのではなく自ら主体的に学ぶ、学びとる姿勢である。

大学教員の仕事は「教育と研究」。ともすればどちらを重視すべきかと悩む教員の例もあるが、大学教員たる者、両方とも大事と心得、両立を図らねばならない。教育とは単に知識や技能を教えることではなく、学び方を教えることによって、学生の学びをサポートすること、主体的に学ぶ学生を育てることである。主体的に学ぶ学生は、卒業論文あるいは大学院の研究を通じて、教員の研究推進の大きな戦力である。すなわち、学生の力を引き出す「教育」を通じて、「研究」を推進していくことが可能となる。このような教育と研究の両輪の結合が、教員個人および教員集団にとって重要であり、一方学生側にも結合のキープレーヤーとしての参画が求められている。

<主な研究テーマ>

私の専門は水文学（すいもんがく）。水は生命の源であり、人間の日常生活、生産活動の必

須の資源であると同時に、種々の生物の生息を支える自然環境の基盤でもある。一方、ときには豪雨が甚大な洪水被害をもたらすこともある。こうした「水」の実態を正確に把握し、制御する（治水・利水）ための基礎的な学問が水文学。具体的には、河川流域における降雨から流出にいたる一連の水文現象を、主に数値モデルを用いて解析することが中心課題。このような水文モデル解析を母体に、その応用的分野として、水資源・灌漑水利システムの評価や水質環境制御などを課題として研究を進めてきた。

国内・海外の様々な事例を研究対象としてきたが、特徴的なのは東南アジアにおける水と農業に関する研究。東南アジア（とくにタイやカンボジアの大陸部）において、水は日本で考える以上に貴重な資源。熱帯だけに水さえあれば3回米を作ることが可能ながら、乾季には草も枯れるほどの土壌の乾燥のため灌漑なしに作物は育たない。雨季の雨量もさほど潤沢ではなく、灌漑水源は不足しがちである。こうした中で、限られた水資源をいかに効率的に利用するかが農業発展の鍵となっている。具体的な研究課題は、「東北タイにおける天水田稲作の安定性」、「インドネシア・ジャワ島における流域的水資源・水環境管理」、「カンボジア・メコンデルタにおける洪水氾濫の解析」、「タイ及びカンボジアにおける米の多期作化」など。

これらの課題を大学院生・卒論生の研究テーマとして与え、毎年学生とともに現地調査によってデータを集めて研究を進めてきた。学生の主体的学びの前提・契機として重要なのは好奇心と問題意識である。海外での現地調査という経験は、好奇心・問題意識の醸成に大きな意味をもつと考えている。

2. キャリアパス

<学歴・職歴>

1970年東京大学理科I類に現役で合格するも、教養学部・駒場生活に2倍の時間をかけ（2倍の教養あり？）、1974年ようやく農学部農業工学科に進学。その後1976年に同大学院農学系研究科に進学、1978年修士課程修了、博士課程進学。ここでも本来3年間の博士課程修了に約5年を費やした。1982年12月に在籍研究室の助手に採用され、9年間助手生活。この間の1988年8月～1990年8月、タイ・バンコクにある国際大学院大学・アジア工科大学AITに派遣され、アジア諸国の学生を相手に講義と修士論文指導を体験。1992年1月、宇都宮大学農学部助教授として赴任。2000年1月、教授昇任。学長特別補佐、留学生センター長、副学長（点検評価担当）などを歴任。2017年3月定年退職。

<海外経験>

前述のAITへの派遣で、講義や論文指導、会議もすべて英語で仕事するという初めての経験。1年目は講義の準備などに四苦八苦。かなり辛い日々であったが、苦勞の分なんとかできるという自信を得た2年間であった。それを契機にその後、国際会議への出席、海外現地調査研究、海外との大学間交流などに積極的に取り組むことになり、海外からの留学生も多数受け入れて指導してきた。こうした活動で濃密な海外人脈を培うことができ、その人脈が現地調査実施を容易にするというサイクルが出来ている。

3月に退職後、国際交流担当の特命教授に任命され、その仕事の一部として、タイ・カセサート大学に宇都宮大学のサテライト・ルームを開設する予定で、現在（6月末）その準備を進めている。

3. 分科会の内容

言葉の壁や生活習慣の違いなど、海外の大学で学ぶには様々な障害があるけれども、その経験から得るものはきわめて大きい。語学習得のため欧米の大学に行くのもよいが、東南アジアの大学も留学するに値する。研究の題材もたくさんころがっているので、卒業論文や大学院で海外の研究課題に取り組むのもおすすめ。分科会の進め方は現在考慮中ですが、「大学出てからどうしたいか?」、「大学で何を学ぶか?」、「海外留学に何を期待するか?」について大いに発言してもらいたいので、各自それらの問いについて考えをまとめておい

4. キーワードリスト

海外留学、大学での学び、東南アジア、国際交流協定締結校、外国語習得

5. 参考資料等

- 下野新聞記事「学問のススメ」

6. 事前予習用リーディング課題

上記参考資料を別添で事前配布しますので、読んでおいってください。また、入学時に各学生に配られているパンフレット「宇都宮大学の学士課程教育ー学生の皆さんへの約束ー」は、大学における教育（学生にとっては学習）がどういう考えでなされているかを説明する大事な資料です。とくに各学科のプログラム・シラバスの部分に目を通しておい

足元から考える国際協力～世界との繋がり・世界の見方～

☆講師プロフィール

氏名：下田 寛典（しもだ とものり）

所属：特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター
タイ事業担当

P-nong Learning Center（PLC）共同代表



略 歴：

1980 年生まれ。2001-2002 日本国際ボランティアセンター（JVC）主催による「タイの NGO で学ぶインターンシッププログラム」に参加。タイ児童養護施設にて 1 年間ボランティア活動に従事。2005 年から JVC 職員として緊急支援担当（インド洋津波、パキスタン地震、インドネシアジャワ島地震、東日本大震災）、タイ事業担当（長期研修、スタディツアー、若手農民交流の企画・運営）に従事。現在も JVC のタイ事業担当に携わる傍ら、2015 年、日タイの市民レベルでの交流プログラムの促進のための団体「P-nong Learning Center（PLC）」を設立、共同代表を務める。

1. 仕事の内容・研究テーマ

専門は、自然災害の被災地における緊急・復興支援、農業・農村開発、交流と人材育成。特に日本とタイの市民セクターの間での研修・交流プログラムの企画・開発・運営・評価に注力している。現在は、食料だけでなくエネルギーを含めた地域循環型の自給社会に取り組む日本の実践者とタイのコミュニティ開発の実践者との交流を通じて、持続可能なコミュニティの担い手育成やそのノウハウを学ぶプログラムを企画・実施している。ほかにも国際協力の入り口になるような映画上映会やスタディツアーの企画・実施、「いのちのいただきかた」を親子で学ぶプログラムの企画など、NGO とそれまで関わりの薄かった新規層の参加促進を目指して、あの手この手で取り組んでいる。

2. キャリアパス

<就職氷河期と大学進路>

大学進学に際して、就職先として微かに明るい希望が見える IT 業界に望みをかけて、「なんとなく」コンピューターを専攻。2 年次を終え「餅は餅屋」に任せるべきと、自分が本当に社会で役立つことは何かを模索するようになる。

<タイに飛び込んだ 20 歳>

コンピューターに辟易し、授業中に「インターン」「長期」「農村」「ボランティア」と検索して出てきたのが、JVC のインターンシッププログラム。「自分探し」を目的に、ボランティアの「ボ」の字も分からず、タイに飛び込む。1 年間農村部にある児童養護施設に滞在し、施設内の農園の世話を担当。初めて触れる農業に自然と人間の「生きる力」を見出

し魅了される。一方で、体験と言葉の結びつきの重要性を学ぶ。体験の伴わない言葉に何の意味もないのだ。

<自分を育ててくれたタイに恩返しを>

「お世話になったタイへの恩返し」の気持ちが途切れることなく、結果、日本での就職活動をせず大学卒業。ボランティアをしていた児童養護施設からご縁をいただき、2004年、再度タイへ。スタッフとして迎えられ、月給 2,000 バーツが初任給。同年 12 月、インド洋津波が発生。滞在先の最寄りの町が被災した。日本に一時帰国中に JVC より津波の緊急支援担当のご縁をいただき、JVC 入職。

<自然災害とコミュニティ支援>

世界・日本各地での自然災害の被災地における緊急・復興支援に携わる。コミュニティや暮らす人を中心に置いた緊急・復興支援のベースとして、農村開発・地域開発の手法やアプローチが効果的であると実践を通じて学ぶ。その後、タイ事業が行なう日タイの若手農民交流やスタディツアー、長期研修も担当。

<二足のわらじ>

2015 年、JVC のフルタイム勤務をやめ、パートタイムに転換。その傍ら、自身の団体 PLC を立ち上げ二足のわらじになる。より実験的な取組みは PLC で、仕組みやシステムづくりは JVC で、と機能を分け、往復することで、「想いを形にする」NGI (Non-Governmental Individual という造語)として活動している。

3. 分科会の内容

食の安全保障＝フード・セキュリティの危機が叫ばれています。かつては「飢餓」という形が代表的だった食料問題も、その中身はずいぶん変わり、日本で暮らす私たちにとっても無縁ではなくなってきました。食の流通や廃棄の状況を踏まえながら、世界と私たちの暮らしの繋がりを捉えていきます。そして、「グローバル人材の育成」が、単に海外で活躍する人材を育てることだけでなく、日本で暮らす私たちの「足元」から世界を捉え行動に移せるようになることを、「食」を取り巻く世界の状況を事例に考えていきたいと思えます。

4. キーワードリスト

以下の言葉の意味を調べてきてください。(イ)緑の革命、(ロ)有機農業、(ハ)地産地消、(ニ)身土不二、(ホ)Community Supported Agriculture (CSA)

5. 参考資料等

- 家族農業の大義 「和食の世界文化遺産」登録と「国際家族農業年」の意味を読む
<http://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2014/201401.htm>
- タネは誰のもの? 「種子法」廃止で、日本の食はどう変わるのか——種子の専門家に聞く
<http://kokocara.pal-system.co.jp/2017/05/29/seed-yoshiaki-nisikawa/>

6. 事前予習用リーディング課題

当日までの任意の 1 日の 3 食の写真を撮ってきてください。その際、原材料の生産地が分かるものも併せて撮影 (メモ) してきてください。ファミレスのメニューや、インスタ

ト食品の場合、原材料名のある箇所等。学食の場合は、原材料の生産地を聞いてみましょう。自炊の場合、使った食材の生産地がわかれば記録（メモ）してきてください。

- 『日本人は「食なき国」を望むのか 誤解だらけの農業問題』 山下惣一
2014年8月1日発行 家の光協会

自分の“コア”を探る～国際協力は学びの連続～

☆講師プロフィール

氏 名：鈴木 真里（すずき まり）

所 属：

（特活）アジア・コミュニティ・センター21（ACC21） 事務局長・理事

（公信）アジア・コミュニティ・トラスト（ACT）チーフ・プログラム・オフィサー

（特活）国際協力 NGO センター副理事長（2015 年～17 年 5 月）



略 歴：

大学卒業後、企業に約 3 年半勤めたのち、日本の国際協力 NGO のネットワーク団体である（特活）国際協力 NGO センター（JANIC）に約半年インターン、その後有給専従職員としてアジア担当／渉外、国際担当（アジア）プログラム・オフィサー（～2005 年 3 月）。2005 年 3 月にアジア・コミュニティ・センター21（ACC21）の設立に参加、現在事務局長、理事。2000 年より現在まで、アジア開発途上国の現地 NGO に助成を行う日本初の募金型公益信託「アジア・コミュニティ・トラスト（ACT）」事務局を担当し、11 カ国の現地 NGO への助成事業調査、モニタリング、評価を行う。ほか、マイクロファイナンス、カンボジアコミュニティ幼稚園、スリランカ女性支援、調査、人材育成などを担当。

1. 仕事の内容・研究テーマ

NPO 法人の事務局長として組織の管理運営、自分が担当する事業の業務、ネットワークの会議への参加、他セクター（主に企業、労働組合、学術機関、助成財団）関係者との会合、寄付者や会員などドナーへの対応（実施事業の進捗状況の報告、完了・成果報告）など、多様な業務を行っています。現在は調査、現地 NGO との共同事業の企画・実施（スリランカ女性支援）、企業 CSR 連携事業、人材育成事業、助成事業を担当しています。助成事業（ACT）ではインドネシア、インド、ミャンマー、ラオスの事業発掘調査、助成先団体との連絡調整、現地モニタリング（少なくとも年 1 回は現場訪問）、進捗・完了報告のとりまとめ、事業評価、運営委員会へのプレゼン、報告、ドナーへの報告を行っています。

2. キャリアパス

大学では経営（国際経営）を専攻し、企業調査会社に就職しました。その後、国際協力の仕事に就きたいという思いが募り、JANIC「NGO 就職ガイダンス」に参加し、その後無給のインターンとなりました。フラットな組織で、各人が物おじせず意見を言い、意思決定をしていくプロセスを目の当たりにしてこれこそ自分のいる場所だ、と思いました。NGO には現場の開発事業の専門家だけでなく広報、会計、組織運営、調査、渉外など多様な専門性を持つ人がいて、私も会員管理、顧客対応、PR 文の作成、調査データの収集などで、前職等での経験が役立ちました。国際協力 NGO の現状や国内外のネットワークなど幅広い情報に触れ、政府、企業、労働組合などマルチ・セクターとの連携事業も担当

しました。

日本において現地の NGO に直接助成をする財団や NGO は非常に少なく、その中で長い歴史をもつ ACT の担当になったことが、自分のキャリアを形作るうえで重要な契機となりました。アジア諸国には日本をはるかに上回る数・規模で、高い専門性をもつ優秀な人材を擁する NGO があり、彼らの視点、アプローチ、経験から多くを学んでいます。10ヶ国以上でのプロジェクトに携わり、現地の人々から学ぶ毎日です。

助成事業の選定においては、申請団体の組織や運営や過去の実績などを調べ、総合的に審査する査定能力、申請団体に代わって事業概要を説明するプレゼンテーション能力が求められますし、(語学力だけでない) コミュニケーション能力が必要となります。助成事業は収入向上、教育支援、農業農村開発、保健医療などその分野は多岐にわたっていますので、文化生活様式から政治経済情勢、分野の基礎的な知識まで幅広く備え、最新情報などをアップデートするようにしています。

3. 分科会の内容

国際協力に携わる人たちの年齢やキャリアも実にさまざまで、それに至る道はひとつではありません。“社会”と“自分”、自分の“コア”とは何かなど、私やまわりの人たちの経験を参考にいただきながら、皆さんと一緒に考えます。最も重要なことは問題意識をもつこと。問題意識とビジョンを共有する人たちと活動できるのが NGO の強みです。分科会では、まずアジア開発途上国の現状について、課題別でケーススタディを紹介したうえで、それらの問題と自分はどのような関わりがあり、どのような立場(NGOに限らず研究者、企業等)で関わりたいか、そのために今後何をするかなどについて考えていきます。

4. キーワードリスト

人間の安全保障、Social Business、SDGs(持続可能な開発目標)

5. 参考資料等

1. 「第三世界の農村開発 貧困の解決—私たちにできること」(ロバート・チェンバース著、穂積智夫、甲斐田万智子翻訳、明石書店)
2. 「当事者主権」(中西正司、上野千鶴子著、岩波新書)
3. 「バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ—」(鶴見良行著、岩波新書)
4. 「貧困の克服—アジア発展の鍵は何か」(アマルティア・セン著、集英社新書)
5. 「社会変革を進めるアジア現地 NGOs ～ACT パートナー団体の軌跡とこれからのアジア～」(http://act-trust.org/photo/ACT_Booklet_201308.pdf でダウンロードできます)
6. 「ソーシャル・ビジネス革命—世界の課題を解決する新たな経済システム」(ムハマド・ユヌス著、早川書房)
7. 「辺境から世界を変える —ソーシャルビジネスが生み出す「村の起業家」」(加藤徹生著、井上英之監修、ダイヤモンド社)

6. 事前予習用リーディング課題

本分科会では、大きく分けて3つのテーマで考えていきます。上記「参考資料⑤」のうち、「参考資料1」と「参考資料5」は全員目を通してください。

その他の参考資料は、事前に入手できれば下記 A～B の各テーマでの参考資料のいずれか 1 つの参考資料は目を読んでいただければと思います。入手が難しければテーマについて自分なりに考えてください。

- A) 事業・活動の主体はだれか？（参考資料 1 および 2。参考資料 1 は古い書籍ですのでコピーを用意し、ダウンロードできるようにしていただきます）
- B) 日本とアジア（参考資料 3 および 4。日本にいる私たちとアジアとの関係についてのヒントです）
- C) 社会変革のための手段（参考資料 5～7。参考資料 5 は記載 URL でダウンロード可。）

多文化共生社会のなかの活動カー労働、仕事、活動、キャリアー

☆講師プロフィール

氏 名：田巻 松雄（たまき まつお）

所 属：宇都宮大学 国際学部 教授

略 歴：

1956 年生まれ。筑波大学大学院社会科学研究科修了。社会学博士。

1996 年より宇都宮大学国際学部勤務。2008 年、国際学部が開設した多文化公共圏センターの初代センター長に就任。外国人児童生徒支援を目的とする宇都宮大学 HANDS プロジェクト研究代表を務める。2013 年 4 月から 2017 年 3 月まで 4 年間国際学部長を務めた。



1. 仕事の内容・研究テーマ

本学部では、社会学的・問題意識をベースに、教育・研究・社会貢献に取り組んで来ました。授業では、学部専門科目として、国際社会論、地域社会論、現代日本社会論を担当しています。国際社会論では「身近な現実と世界とのつながり」、地域社会論では「人の国際移動と日本」、現代日本社会論では「ホームレス問題からみる現代日本」を主題としています。大学院では、「東南アジアの開発と地域社会」や「国際都市問題論」などを担当しています。研究では、外国人労働者や外国人児童生徒の現実を調べながら「多文化共生」のあり方を追究しています。社会貢献では、HANDS プロジェクト（外国人児童生徒支援事業）を代表者として 7 年間実施してきました。HANDS の主な取り組みとしては、多言語（9 言語）による高校進学ガイダンス、外国人児童生徒在籍校への学生ボランティア派遣、国際理解サマースクール等があります。

2. キャリアパス

< 生い立ち >

北海道夕張市で生まれ、高校まで暮らしました。夕張と聞けば、石炭、メロン、財政破たんなどが浮かぶでしょうか。かつての夕張は、石炭産業で日本のエネルギーを支えていました。国のエネルギー政策の転換や炭鉱事故等で不幸な形で石炭産業を失った夕張は、おそらく日本で一番過疎化が進んだ街となってしまいました。現在、9500 人の人口でその半分以上は 65 歳以上という超高齢化社会となっています。自分が学んだ小学校・中学校・高校はすべて廃校になってしまいました。そんな夕張の歴史や文化を記録に残しておきたくて、数年前に『夕張は何を語るかー炭鉱の歴史と人々の暮らし』という本を出版しました。

< 大学時代 >

家庭や夕張を嫌いだったわけではないと思いますが、家庭と北海道を出たくて、本州の大

学に進学。社会的なことを学びたいと言う程度の漠然とした気持ちしかなかったのが正直なところですが、2年生の時に超強烈な社会学の教員と出会い、社会学の専攻を決めました。今でもその教員とはお付き合いさせていただいて、文字通りの恩師として公私ともどもお世話になってきました。大学時代は古典も含め結構一生懸命本を読みましたが、同じ学生宿舎に暮らしていた M が毎週のように買っていた本の数と読書量は半端ではありませんでした。卒論テーマは国家とか権力とか、大きなことを考えたくて、論文題目は「福祉国家の考察」。

<大学院時代>

迷わず、大学院に進学。博士課程 5 年間の大学院だったので、進学時に将来は大学で働きたいという気持ちはある程度固まっていました。大学院 3 年次だったか、5 か月間フィリピンに私費留学。多くの驚きがありましたが、ホームステイさせていただいていたこともあり、家政婦さんの存在や生活ぶりもその一つ。非常に低い給料で働いていたことや食事は雇用者が食べた後の残り物を食べていたこと等。ある意味純真だった青年には驚くことばかりでした。修士論文の題目は、「フィリピン政治における軍部の役割と・・・」。大学院には 5 年半在籍しましたが、博士号取得は出来ませんでした。満期退学し、恩師の紹介もあり、名古屋の私立大学の教員となりました。

<最初の職場>

当時この大学の学生たちの大半は、この大学を希望して入学してきた学生たちではありませんでした。他の志望校に入れず、この大学に入ってきた学生たちが多い状況でした。このこともあり、全般的に学生たちの学びに対するモチベーションは低い状態でした。そんな学生たちを相手にどうやったら学生たちのモチベーションを上げることが出来るのか、が大きな課題でした。今から考えれば授業のレベルははなはだ低いものではありましたが（今でも自信ありません）、学生たちとは良く「付き合い」ました。家にもたびたび呼んで食べたり飲んだりしましたし、中国、香港、フィリピンなどにも一緒に行きました。ホームレス支援の現場にも学生たちを参加させました。この大学在職中に博士論文を完成させました。題目は「フィリピンにおける権威主義体制と民主化」でした。

<宇都宮大学国際学部へ>

縁あって、本学部へ赴任しました。40 歳の時だったと思います。国際学部が 2 期目の学生を受け入れた時期でした。以来、ほぼ 20 年国際学部の教員を務めてきました。2013 年 4 月から 2017 年 3 月までは 4 年間学部長を務めました。この 4 年、ミッション再定義や改組など実にいろいろなことがありました！！先に紹介した夕張に関する本を含め、『地域のグローバル化にどのように向き合うか - 外国人児童生徒教育問題を中心に - 』、『越境するペルー人 - 外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』、『未来を拓くあなたへ - 「共に生きる社会」を考えるための 10 章』の計 4 冊の本を出版できたことも大きな思い出です。

3. 分科会の内容

自分は、学部 4 年、大学院 5 年半の学生生活を終了後、名古屋の私立大学の教員となり、その後本学部へ異動し、今日に至っています。したがって、これまで文字通り「大学人生」を送ってきました。学生時代アルバイトはたくさんやりましたが（郵便配達、データ入力、家庭教師、塾の講師、団子屋の従業員、割烹の従業員、教材の営業マン、不動産屋の営業マン等）、「仕事」は大学しか経験ありません。そんな自分がこの合宿セミナーの講師とし

て皆さんに何を提供することが出来るのか、するべきなのか、少し迷いましたが、結論として、第一に、これまで出会ってきた様々な人を思い出したり、関連文献・資料をテキストにするなどして、「仕事」や「キャリア」について、正面から考える機会を提供したいと考えました。ハンナ・アレントは、『人間の条件』のなかで、「人間の条件の最も基本的要素となる活動力は、＜労働＞（labor）、＜仕事＞（work）、「活動」（action）の三側面から考察することが出来る」と語りましたが、こうした議論は大いに参考になります。人間が行ってきた仕事の歴史、この社会を支えている世界中の仕事、仕事の個人的な意味と社会的な意味、労働と仕事と活動とキャリアとの関係等について一緒に考えてみましょう。第二に、「共生」や「多文化共生」を考えるための知識・力として、①日常とその世界を支えている無数の事柄や仕組みについての理解、②他者への共感力（他者と喜怒哀楽の感情を共有しようとする関心と意欲）、③考え方・価値観・人間観を自覚的に反省することを可能にする基礎知識の3つを重要と捉え、この点に関する議論を皆さんと行いたいと思います。

さて、この2つの課題に対する知的格闘を二泊三日の合宿でいかに行なうのか、当日まで思案していきたいと思います。

4. キーワードリスト

労働、仕事、活動、キャリア、グローバル人材

5. 参考資料等&事前予習用リーディング課題

田巻松雄『未来を拓くあなたへー「共に生きる社会」を考えるための10章』

下野新聞新書、2017年3月

これまで考えてきたことの中で特に伝えたい現実や発したいメッセージをこの本の10章にまとめました。ぜひこの本を読んで、質問を3～5つ用意してください！！

ワーク&ライフをデザインしよう

☆講師プロフィール

氏 名：芳村 佳子（よしむら よしこ）

所 属：（公財）とちぎ男女共同参画財団 主査

略 歴：

1999 年よりパルティとちぎ男女共同参画センターに勤務。女性の自立支援講座、相談室運営、情報誌編集等に従事。キャリアコンサルタントとして女性の再就職支援や学生のキャリア形成、防災士として避難所支援や防災ワークショップに取り組む。



1. 仕事の内容・研究テーマ

ジェンダー平等を進める県の施設「パルティとちぎ男女共同参画センター」で、講座・相談・情報提供事業に従事してきました。現在は、DV 被害者の回復支援、産後うつ防止、再就職・キャリアアップ講座、学生の子育てインターンシップ等を担当しています。

最近の男女共同参画施策は、女性の活躍推進、働き方改革、ワークライフバランスやイクボス推進、とやっと主流に近づいてきました。22 年前にパルティが開館したときは、「女性センター」という名称で、「女性の人権を守る砦」という存在でした。仕事を辞めて育児に不安を抱える主婦や、DV 被害、離婚、セクハラ、性暴力等で悩む女性たちがパルティへ相談しに来て、研修で力をつけて自立していきました。

地域で孤立し、誰にも相談できない人たちを置き去りにしない、という想いは、今もパルティの原動力です。子どもたちとその親の貧困問題、セクシュアルマイノリティの生きづらさも顕在化した課題です。

上記のような問題に直面してから気づくのではなく、学生時代から考えてもらうために、高校や大学のキャリア教育の授業でもお話しています。

また、3.11.後は、女性の視点での避難所の環境改善や暴力防止にも取り組んでいます。

2. キャリアパス

栃木で育ち、大学時代は東京へ。英米文学科で女性作家や文学の中の女性の描かれ方を勉強しました。卒業後は貿易会社で働きましたが、夫の仕事の都合で栃木に帰省することになり、やむなく退職しました。

1 年間のアルバイト後、「（財）とちぎ女性センター」に就職。女性問題を解決していく仕事にやりがいを感じ、主婦の再就職支援、相談室運営（暴力被害者支援）、女性政策塾（審議員・議員の養成）等に没頭しました。情報誌の取材では、県内の女性リーダーやマイノ

リティの声を直接聴き、寄り添う支援の大切さを学びました。女性活動家との出会いとネットワークは大きな宝です。

30歳で長男を出産。夫は仕事が忙しく、病弱な息子の育児に苦勞しました。育休復帰後は、子育て女性の孤立防止に力を注ぎました。キャリアカウンセラーの勉強をして、子育て女性のライフデザイン講座や、学校への出張セミナーも始めました。

東日本大震災時は県内の避難所をまわり、仕切りの導入や女性・子どもへの暴力防止をお願いしました。その後、ジェンダー視点での防災ハンドブックを作成し、各地域で防災ワークショップを実施しています。

3. 分科会の内容

日本は性別役割分業意識が根強く、ジェンダー平等においては途上国と言われています。「働き方改革」により、男性中心の長時間労働の見直しがやっと始まりました。

また非正規雇用の増加により、格差と貧困が拡大。シングルマザーと子どもたちの貧困問題も（永年の問題でもあり）喫緊の課題です。

分科会では、

- ① 国際的なジェンダー指数から、日本の働き方・暮らし方の問題点を探る。
- ② 自分と社会全体のワークライフバランスや、マイノリティを排除せず多様性に寛容な地域の在り方を考える。
- ③ 県内の女性活動家を紹介し、みなさんのキャリア形成のヒントとする。
- ④ 成果品として「なりたい姿マップ」を作り、自身のキャリアデザインと社会全体のデザインを視覚化する、という予定です。

4. キーワードリスト

GGI（ジェンダーギャップ指数）111位、ワークライフバランス、働き方改革
また、「ワーク&ライフ デザインブック」<http://www.parti.jp/data/wldbook.pdf>
の4ページの「用語解説」の言葉にアンテナを張ってみてください。

5. 参考資料等

- 「女性を活用する国、しない国」竹信三恵子著、岩波ブックレット
- 「しあわせに働ける社会へ」竹信三恵子著、岩波ジュニア新書
- 「女子と就活」白河桃子・常見陽平著、中公新書ラクレ
- 「「産む」と「働く」の教科書」齊藤英和・白河桃子著、講談社

6. 事前予習用リーディング課題

分科会で、「ワーク&ライフ デザインブック」<http://www.parti.jp/data/wldbook.pdf>
の18ページにある「なりたい姿マップ」を作成します。事前に、

① 17ページの空欄に記入。

② 下記に関する雑誌・写真・絵などの切り抜きを集めて持参。

将来なりたい職業、なりたい姿（目標とする人、どんなものに囲まれていたい）、
住みたい・行きたい場所、どんな社会を作りたいか
今の自分の好きなことや興味のあるもの、笑顔にしたい人（家族等）・・・等

2017 年度国際キャリア教育プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア教育」事前学習資料集

発行日：2017 年 7 月 12 日

発行：宇都宮大学 国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

学部		学科	
学年		氏名	

